戦後日本の民間運営型展示施設における住まいの展覧会に関する研究

代表研究者　五十嵐 太郎　(東北大学大学院工学研究科　教授)
共同研究者　菊地　尊也　(東北大学大学院工学研究科　博士後期課程)
〃　吉野　弘　(東北大学大学院工学研究科　博士後期課程)
〃　貝沼　泉実　(東北大学大学院工学研究科　博士後期課程)

[研究報告要旨]

本研究は、住宅と社会の新たな接点構築に向けた基礎創出に寄与するものである。その端緒として、戦後からポストバブル期にかけて民間施設で開催された住まいに関する展覧会の動向をまとめる。具体的には、展覧会場となった各施設の保有する一次史料を用いた空間分析と関係者へのヒアリングを通じ、個別具体的にその史的変遷を解明することを目的とする。

本研究では、主に企業メセナの流れとともに展示の活動が始まった、LIXILギャラリー、TOTOギャラリー・間、TNプローブ、リビングデザインセンターOZONE、パナソニック汐留美術館、ギャラリーA4、松坂屋美術館へのヒアリングを実施し、現地視察とともに関連資料などを閲覧し、その情報を得た。加えて、デザイナーを含む、百貨店催事の関係者4名から当時の仕事について話を伺った。

これと並行して、1980年代以降の建築専門誌、一般誌、展覧会図録を調査し、建築・住宅・デザインに関する展覧会のデータベースを制作した。また研究代表者の五十嵐は、時間を遡って、近代建築運動を牽引した分離派建築会と百貨店の関係、パルコや無印良品のブランディングに関与し、1980年代に展示のオルタナティブスペースも開設した小池一子、そして近年の民間運営型の建築ギャラリーにおける展示デザインの動向についての諸論考を公的な刊行物（建築専門誌）およびウェブ・メディアに寄稿した。さらに研究協力者の菊地は、映像配信プラットフォーム「シラス」の番組に出演し、百貨店を中心に民間施設の住まいに関する展示に注目しつつ、20世紀以降の建築展覧会の全体像に関する口頭発表と討議を行った。